



モンゴル滞在日記 I

木之内せつ子

11年前からほとんど毎年モンゴルに行っている友人Mに誘われて、私のモンゴル行きはこの夏やっと実現した。以前から一度は行ってみたいと思っていた国だ。Mがウランバートルのモンゴル人馬頭琴奏者の家にホームステイしたのがはじまりで、それ以来、日本のMの家には、この10年入れ替り立ち替りモンゴルからの留学生やその家族がホームステイしている。留学生たちは彼女を“日本のお母さん”といって慕っている。

7月4日(水)

MIATモンゴル航空、OM502便は、定刻19:10(現地時間)きっちりにウランバートル空港(チンギスハーン空港)に到着した。成田からウランバートル(UB)まで5時間半、時差は1時間。

日本でMから“定刻”なんてモンゴルではほとんど通用しないと聞いていたので、飛行機が定刻に着いたのは驚きだった。

“モンゴルタイム”という言葉がある。時間の約束をしてもその通りになることはまずないという。朝といったら昼、昼といったら午後3時過ぎ、夕方といったら夜、夜といったらその日は無理ということだ。Mも私と待ち合わせると遅れることが多い。実は彼女も時間だけはしっかりモンゴル人になっているのだ。

空港で出迎えてくれた二人の男性(デルメとトガ)は数年前留学生として来日し、日本のMの家にホームステイしていた。卒業後帰国し、今は仲間4人で起業し頑張っている。ふたりは“日本のお母さん”Mと熱い抱擁、私とはもちろん握手だけ。

トガの運転でウランバートル(UB)市内に向かう。8時を過ぎてても外はまだ明るい。市内に近づくにつれて車の量が増え交通渋滞。市内は高層ビルが林立する大都会。1時間ほどかかってまちの中心から1kmくらいのところに

ある彼らのオフィスに到着。マンション3階、3LDKで100m²くらいのそのオフィスの1室(トガの部屋)が今夜からの私たちの宿である。

外は雨。モンゴルは雨の少ない国と聞いていたが初日から雨に降られた。年間の降水量のほとんどが、6月から8月中旬に降る。

突然電気が消えて停電になった。誰も驚かない。すぐにローソクが用意されたが、2~3分で明るくなった。停電はモンゴルでは日常茶飯事だという。滞在中ほとんど毎日経験した。特に雨降りに多いそうだ。

中国の内モンゴル自治区を内モンゴルと言っているのに、何の気なしに“外モンゴル”と言ってしまったら、Mが即座に、「それは清朝から見た呼称で、モンゴル人はそう呼ばれるのを嫌がる。モンゴル人の意を汲みこの呼称は用いるべきではない」と私を注意した。こころしよう。

Mはかれこれ10年もモンゴルに関わっているが、それにしてはお世辞にもモンゴル語が上手とは言えない。日本では彼女のところにホームステイしていた留学生たちは日本語が上手だし、彼女がモンゴルに行ったときは常時そのうちの誰かがエスコートしてくれるから、現地の言葉をほとんど必要としない。今回UBで私たちが宿泊しているところの4人も日本への留学経験のある人たちだから、言葉の心配はない。

7月5日(木)

Mと私はふたりだけで歩いてまちに出た。目に入る看板が読めない。そこでハタと気づいた。モンゴルはキリル文字(ロシアンアルファベット)を使う。Mもキリル文字を読めないと言う。でも堂々としているし、土地勘はかなり良い。

10分ほど歩いて横道に入るところでまずは両替。昨夜立ち寄ったときには閉まっていた両替屋だ。銀行よりレートが良いらしい。1万円ですぐに167,000トゥグルク(Tg)。急に財布が分厚くなりちょっとリッチな気分。

まちの中心のスーパーマーケットの横を過ぎると中央郵便局がある。ここを目印に歩き始めると良いとMが教えてくれた。郵便局の中に入って奥に進むと絵はがきやちょっとした土産物が並べてある売店がある。絵はがきの種類も多いし切手も一緒に



販売している。さっそく大量に絵はがきと切手(日本まで1,000Tg+税金10%)を購入。

それからまたしばらくまちをぶらぶら歩いて、メルクーリ・ザハ(市場)へ。ザハでは肉・魚・乳製品・野菜・果物などのほか、国外からの輸入食品、スパイスなどほとんどの食料品が売られている。

ザハの入口でザヤと待ち合わせている。ザヤの夫のダミが現在日本に留学していて、彼女も2年前から来日してMのところにもホームステイしているが、夏休みでモンゴルに帰っている。

12:00の待ち合わせだったがモンゴルタイムで30分ほど遅れて彼女は現れた。昨年1月、日本で生まれた娘のスンドリと一緒に。近くのレストランで昼食をとり、ザハで買い物をした。肉は非常に安い野菜や果物はそれに比べてかなり高い。午前中はカラッと晴れていたのに、買い物をしている間に雨が降りだした。スコールのような土砂降りの雨で雷も鳴っている。小降りになったところで、ザヤの車で送ってもらった。こんな雨でも傘をさして歩いている人はほとんどいない。

家(彼らのオフィス)に帰り、夕食の支度にかかった。彼らは、今朝からはもう、1日1食は私たちに食事を作ってもらえると期待しているらしい。モンゴルまで来てまさかぁ~!? と私は思ったが、Mはそのつもりらしい。結果的には私も野菜を切ったり、食器を洗ったりくらいの手伝いはした。ここの台所には大鍋1個とフライパンが1個しかない。

Mは慣れた手つきで、まずご飯を炊いて別の容器に移して、それから次の料理にとりかかる。因みにご飯は塩と油を入れて炊く。今夜の料理は肉野菜スープ。人参・タマネギ・ジャガイモをかなり大きく切ってニンニクと一緒に油で炒めてから、骨付きの肉(野菜の何倍もの量)を入れて煮込み、塩とスパイスで味付けする。美味しい! モンゴル人の骨付き肉の食べ方は見事だ。ナイフで肉を削ぎながら口に運び、骨だけ残してきれいに食べきる。サラダもつくったが、モンゴル人はほとんど手をつけず。スープのなかの肉はほとんどなくなったが、野菜はかなり残った。翌朝残りのスープにご飯を入れて雑炊にしたらさらに美味しく食べられた。雑炊は彼らもよく食べた。



7月6日(金)

朝から雨。排水溝がないからたちまち道路は水浸し。モンゴルの道路は、夏はジャンプ、冬はスケートの練習ができる、ときいていたがその通りだ。水の溜まってないところをみつけて、跳びながら歩くのだ。冬は路面が凍っているから滑るのだろう。

昼近くなっても雨は止まない。昨日買ってきて書いた絵はがきを投函するために郵便局まで出かけた。モンゴルのまちなかには郵便ポストがない。UBの中央郵便局内

には国内郵便と国際郵便のふたつのポストが向かい合って設置されてある。でもおそらくモンゴル国の郵便ポストはここにあるだけだろう。郵便を出すときは郵便局まで足を運んで窓口でお願いしなければならない。郵便配達も原則的にはないそうだ。

郵便局には私書箱があるが、ほとんどが会社用で個人的にそれを利用している人はほとんどいないようだ。だからこちらからモンゴルの知人に手紙を出してもそれは局留めになり、郵便局から受取人に連絡があり、それを受け取りに局まで出向くか配達してほしいかきかれる。配達を希望すれば配達してもらって200Tgの手数料を払う。もちろん取りに行ってもよいのだが、歩いていけるところに郵便局がないのが普通だ。

今はモンゴルでも携帯やパソコンが普及しているから、手紙はますます遠くなる。UBの郵便局に行っても手紙を出すのは外国人旅行者だけのようだ。



7月7日(土)

Mが「今日は七夕だから、日本に留学していた知り合いを呼んで、日本の料理をつくってご馳走する」といだし、朝からあちこちに電話している。留学していた本人やその家族で15人くらいは集まりそうだとのこと。みんな彼女に会うのを楽しみにしているようだ。

七夕の料理って何だろう?

煮物は筑前煮、揚げ物は天ぷらということになった。肉・ジャガイモ・インゲン・人参・シイタケを煮た。天ぷらはいろいろ種類をつくるのはたいへんなのでかき揚げにした。私は一口大のおにぎりを握り、クラッカーにゆで卵とキャビア擬きをのせ、人参とキュウリを長さ10cmくらいの細切りにしてグラスに立てた。

5時集合となっていたが、定刻に現れたのはひとりだけ、7時頃になってようやく10人くらい集まり、「七夕パーティー」は始まった。折り紙を半分に切り短冊にして、それぞれ願いごとを書いた。元留学生は全員日本語で書いていた。さすがである。笹がないので願いごとを書いた短冊はドアにセロテープで貼り付けた。9時を過ぎると、乳幼児を連れて参加していた人たちは帰りはじめた。その時間になってもやってくる人がいた。結局全員が引きあげお開きになったのは12時近かった。

4日間で何人ものモンゴル人を紹介されたが名前を覚えられない。デルメ、トガ、ザヤ、ダミ、スンドリ等々。実際にはそれぞれもっと長い名前らしい。デルメはいただいた名刺にはバトデルメダシュミヤグマルとあった。

翌朝早く私たちはUBから1400km余離れた西モンゴルのホブドに行くことになっている。そこで「ボランティア」をする。実はそれが今回の旅の一番の目的だ。ホブドでの12日間のことは次回に。

(続く)